

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (39) 士師記(6)士師サムソンの父母

聖書の人物で「ヘラクレス」と言えば、「サムソン」でしょう。根は優しいのに、怪力を持って暴れまわり、何度女に騙されても女に溺れ、その単細胞性で墓穴を掘るのですから。けれども、その墓穴に大軍の敵もろとも引きずり込んで、自らの愚かさを償ったのです。そのため、士師としてイスラエルを守った人になりました。



マノアと妻 Jean Bondol 1372

ダン族がペリシテ人の支配を受けながら、まだ南にいた頃、ツォルア出身のマノアの妻に、主の御使いが現れ、告げました。

「あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。今後、ぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないように気をつけよ。あなたは身ごもって男の子を産む。その子は胎内にいるときから、ナジル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。彼は、ペリシテ人の手からイスラエルを解放する救いの先駆者となるだろう。」(士 13:3-5)

妻はただぼう然となり、恐ろしくなり、夫マノアにありのまま伝えました。マノアも驚き、御使いから直接言葉を聞き、その子をどのように育てるべきかを知りたいと祈りました。再び御使いは妻に現れたので、急いで夫を呼び、二人で同じ言葉を再度聞きました。マノアはそれでも理解できず、さらに御使いの正体を探ろうと、名前を尋ね、もてなして様子を見ようと思いました。御使いは「不思議」と名乗り、マノアの捧げ物の祭壇の炎と共に上って行ってしまいました。

マノアはその時初めて主の御使いであったことを悟り、死なねばならないと思うほど恐れしました。けれども妻は「捧げ物を受け取り、不思議なことを告げて見せた以上、私たちの死を望むはずがない」と夫に答えて、御使いの命じたことを守り、やがて男の子を生みました。その名をサムソンと名付けました。

このことからわかるように、マノアは妻にとって頼りがいのある、慎重な、敬虔な信仰者です。マノアの妻は純真で積極的な女性です。胎内にあった時から、与えられた子はすでに、ナジル人として神に選ばれた子であると信じ、断酒し、良いものを食べ、サムソンを育てました。サムソンの使命はペリシテ人からの解放であると告げられましたが、ペリシテ人はアブラハムの時代から強大な力をもった、体格もよく、強い民族でしたから、両親はサムソンが使命をどのように果たせるのか、「不思議」としか思えない気持ちで子育てをしたことでしょう。もちろん髪の毛は切りませんでした。



サムソンとライオン Rubens

サムソンは成長し、ティムナに住むペリシテ人の娘に惹かれ、両親に「彼女をわたしの妻として迎えてください。わたしは彼女が好きです」(士 14:3)と願いました。この率直さ、純真さは母譲りのように思えます。両親は息子がナジル人だと信じていますから、仕方なしに嫁取りに出かけました。その途中の道でサムソンは一頭の若いライオンが向かってくるので、手で子山羊を裂くようにライオンを裂いたのです。娘に会った後、ライオンが気になって戻ってみると、死骸にミツバチの群れがいて、蜜がありました。サムソンはそれを取って食べ、又両親にも食べさせました。

この事件で、自分の怪力、また怪力を恵みに変える不思議な力が与えられていることを、サムソンは知りましたが、誰にもそれを知らせませんでした。